

「支援者当事者研究会」のはじめ方

How do we begin “Parties research for supporters” ?

西川 友理 Nishikawa Yuri / 京都西山短期大学 Kyoto Seizan College

一ノ瀬 かおる Ichinose Kaoru / NPO そーね NPO Soone

横山 弘和 Yokoyama Hirokazu / NPO そーね NPO Soone

迫 共 Sako Tomoya / 浜松学院大学 Hamamatsu Gakuin University

Key words: 当事者研究、支援者支援、対人援助職

目的

2001年に北海道浦河「べてるの家」で始まった当事者研究は、今や精神保健福祉の分野だけではなく、様々な分野で広がりを見せている¹⁾。その中には支援者のための当事者研究もある。だが現在、その多くは精神保健福祉分野に関わる支援者に関するものであり、その他の社会福祉分野の支援者を対象とした当事者研究を実施している例はほとんど見当たらない。

援助者が傷つき体験やストレスから回復する際に必要なものの1つに「自己理解」を挙げている研究はいくつかみられる^{2) 3)}。適切な自己理解は「苦しいのは自分のせいだから仕方がない、自分が変わらないといけない」と、自らに対し自己批判的な自分であるということではなく、「私はこの状況を変化させる方法を探究する」と、苦しみに対して能動的な自分であることが出来る。主観的な個々の苦しみを、複数名で「研究する」、すなわち当事者研究の重要な理念「自分自身で、ともに」の考え方・方法がこの能動的な態度を可能にするのではないだろうか。

以上を踏まえ、当事者研究の手法は、様々な疲弊状態にある支援者が、再び支援に戻る力を取り戻すツールの一つとして有効であると考えた。

そこで、「支援者当事者研究会」(以下、支援者当研)を始めたいと考え、ついては、この会の開始にあたり、「支援者」の特性や、これに「当事者研究」を適応させる意味について考察することで、支援者当研のはじめ方を明確にすることを目的に研究を開始した。

方法

日頃当事者研究を定期的に行っているメンバーを交えて「勉強会」と称した議論を重ね、その内容を書き起こした上でコーディングし、分析、考察を重ねた。勉強会は2017年3月12日から7月31日の間に計6回実施した。

結果

本研究において話し合われた内容は、おおむね以下の3つに分類される。

1) 支援者／支援職について

様々な支援の場には「支援者と被支援者の関係の非対

称性」構造があり、そこにおける支援には「過去の終わりきっていない経験や昔の自分」、「支援者としての規範と生の自分の感情のせめぎあい」などが影響を及ぼす。支援とはその中で「被支援者との適切な距離」を計っていくプロセスでもある。

2) 当事者研究について

当事者研究は「専門職の専門性を否定するものではない」。突き詰めれば「相手を尊重した人間関係における普通の態度」そのものである。しかし、この普通の態度が現代社会では、あまり見られない態度になってしまっている。支援者当研の場でその態度を体験すること自体が、支援者にとって大きな意味を持つと考えられる。

3) 支援者の当事者研究の「場」について

当事者研究はあらゆる人に開かれており、精神保健福祉の分野では支援者と当事者が一緒にしている所もあるにもかかわらず、「わざわざ“支援者のため”の当事者研究をする理由」は何か、また、グループ内に「明確なルールを設定する必要」があるか等、場の整え方についての議論があった。

考察

支援者当研を実施するにあたり、「安心・安全な環境の確保」が最も大切であり、そのために「場を構成するメンバーの多くが基本的な当事者研究の文化を共有していること」と「明確な一定のルール・枠組み」が必要であることが分かった。

今回の勉強会と研究を通じて支援者当研について共通言語のある場と空気があるコミュニティが出来たと考えられる。この繋がりを核に、具体的な活動を実施する予定である。

参考文献

- 1) 熊谷晋一郎編『みんなの当事者研究』(2017年) 金剛出版
- 2) 松田美智子・南綾子「高齢者福祉施設で従事する対人援助職者が共感疲労に陥らないためのサポートシステムの解明」『天理大学学报』68(1) 2016年10月 天理大学
- 3) 赤田太郎「職場人間関係を改善する集団コラージュ法によるメンタルヘルスプログラムの検討：児童養護施設職員自己理解と他者理解が進むプロセスを通して」『龍谷教職ジャーナル』(4), 13, 2017年3月 龍谷大学教職センター